

2022年5月8日高知教会礼拝説教

松浦伝道師

説教:「ペトロの涙」

聖書:ルカによる福音書 22章 54～62節

### ○はじめに

今私たちは、ルカによる福音書を礼拝の中で順を追って読んでいます。今日の聖書箇所において、イエス様は十字架につけられる為、オリーブ山で捕えられ、それまで共に過ごされていた弟子達から引き離されました。これよりイエス様は、十字架の上で息を引き取られるまで、一人孤独に、苦難の時を過ごされます。そして、今、私たちは、大変困難な時代を生きていると思います。新型コロナウイルスによって、先の見えない不安な日々を過ごしています。ウクライナの国において、終わりの見えない悲惨な戦争が巻き起こっています。このような社会の状況において、私たちは、まっすぐに神様だけを見上げて、イエス様に従っていくことがいかに難しい事かを身をもって味わっています。まさに、イエス様が十字架にかかれる直前の弟子たちの思いも、先の見えない不安の中に放り込まれた私たちの姿と重なる部分があるのではないかと思ひながら、今日語られている御言葉に聞いていきたいと思ひます。

### ○イエス様に従うペトロの姿

イエス様は捕えられて大祭司の家に連行されました。マタイ、マルコ福音書は、その時弟子たちが皆イエス様を見捨てて逃げ去ってしまったことを語っています。しかし今私たちが開いていますルカによる福音書では、弟子たちがその時どうしていたかを詳しくは語っていません。その代わりに、すぐその後の本日の箇所冒頭の54節で、弟子の一人であるペトロが、連行されるイエス様に「遠く離れて従った」ことを語っているのです。この「従った」という言葉は、彼らがイエス様によって召されて弟子となり従って行った、という時に使われていたのと同じ言葉です。つまりルカは、弟子たちが逃げ去ったことには触れず、その中のペトロがなおイエス様の弟子として従って行ったことを語っているのです。

しかしそこには「遠く離れて」という言葉が加えられています。イエス様のすぐ後に従って行くことができなくて、それでも遠く離れて、人目を避けるようにこっそりと従って行こうとするペトロの姿がここには描かれているのです。イエス様が逮捕された今、弟子たちだってどういう目に遭うかわかりません。そういう危機的な状況の中で、言い換えれば信仰の試練の中で、なおイエス様に従おうとはしているけれども、恐れに捕えられ、人目をはばかりつつ、遠く離れて従っていく、ルカ福音書ではペトロのそういう姿を描いています。ルカはこのペトロに、弟子たち全体の代表としての姿を見ているのではないのでしょうか。弟子たちが逃げ去ったことにはあえて触れずに、このペトロの姿を語っていることにはそういう意図があるように思ひます。そしてそれは、このペトロが、私たち信仰者みんなの代表でもあるということです。イエス様に従うことがキリスト信者の信仰です。私たちはその信仰に生きること

を決意して、洗礼を授け、信仰者として歩いていくのです。しかし私たちも様々な苦しみ、試練に遭う時、しばしば恐れに捕えられ、イエス様から遠く離れて、おぼつかない歩みで従うことしかできなくなるのです。

### ○十字架という試練を前にして

先月礼拝の中で共に読みました。聖書の箇所は、ペトロがイエス様にたとえ死んだとしても従い続けると告白した箇所でした。イエス様は弟子たちを前にして、これから起こる十字架という苦難を自らが受けることと、弟子たちも十字架の前に立たされるという試練がサタンによって与えられると語っています。しかし、オリーブ山での逮捕の場面において、イエス様を裏切り、逮捕しようとする人々を先導して来た裏切り者のユダも、武装してイエス様を捕えに来た人々も、そして彼らに抵抗して剣を抜いた弟子たちも、皆同じように、サタンによる試練の中で恐れに捕えられ、闇に支配されてしまっています。

この十字架の直前の場面で、サタンによる試練の中で恐れに捕えられ、神様のみ心に従うことができなくなっている人々の姿を記されています。そしてそのクライマックスとして、弟子の筆頭だったペトロが、大祭司の中庭で、試練に負けて三度イエス様を知らないと言ってしまったペトロの姿が今日の聖書箇所なのです。イエス様はそのことを既に34節で予告しておられました。「あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう」とおっしゃったのです。そしてその前の31節には、「シモン、シモン、サタンはあなたがたを小麦のようにふるいにかけて神に願って聞き入れられた」というみ言葉があります。このペトロの姿はまさに私たちを代表する姿であり、試練の中で恐れにとりつかれ、信仰を失ってしまう私たちの姿がここに描かれているのです。

### ○「私は知らない」

ペトロは遠く離れて従い、イエス様が連行された大祭司の家の中庭に入り込みました。人々はその真ん中に焚き火をしてその周りに座っていたので、彼もその中に紛れ込んだのです。彼らから見える所に、逮捕されたイエス様が、見張りの者たちに囲まれています。63節以下には、イエス様が彼らから侮辱を受けたことが語られています。ペトロはその様子を、焚き火を囲んでいる人々に紛れてそっと伺っていたのです。すると、ある女中がペトロをじっと見つめて、「この人も一緒にいました」と言いました。「彼と」という言葉が原文にはあります。この人もあのイエスと一緒にいた、ということです。しかしペトロはそれを打ち消し、「わたしはあの人を知らない」と言ったのです。

それから、少したって、他の人がペトロを見て「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは「いや、そうではない」と言いました。それは直訳すれば「私は違う」という言葉です。それから一時間ほどたって、また別の人が「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張ったのです。この人は「ガリラヤの者だから」という根拠を語っています。おそらくペトロの言葉にガリラヤなまりがあったのでしょう。だから確信を持って「確かにこの人も一緒だった」と言ったのです。ペトロはそれに対して、「あなたの言うことは分からない」と言い

ました。「あなたが何を言っているのか、私にはさっぱり分からない」という感じです。問い詰められ、窮地に立たされた時に私たちはよくこういう言い逃れをします。しかし彼がまだ言い終わらないうちに、突然、イエス様がおっしゃられていた通りに鶏が鳴いたのです。

「わたしはあの人を知らない」、「私は違う」、「あなたの言うことは分からない」、このようにしてペトロは三度、イエス様を知らないと言ってしまったのです。ペトロのこれらの言葉は、マタイ、マルコ福音書のそれと比べてみると、かなり弱々しい感じです。マタイやマルコでは、誓ったとか、呪いの言葉さえ口にしながら、という激しい表現がありますが、ルカにはそういう表現は全くありません。それは、ルカが語っているペトロの言葉は、私たちが普通に口にしそうな言葉だ、ということなのではないでしょうか。私たちが試練の中で、イエス様に従うことができなくなり、「知らない」と言ってしまう、信仰の挫折に陥ってしまう、そのことは、どちらかといえばこのルカが語っているような弱々しい、消極的な仕方では起るのではないのでしょうか。私たちが試練の中で、恐くなって、「知らない、私ではない、何のことか分からない」というふうに弱々しく消極的に、イエス様との関係を否定してしまうのです。このような弱いペトロの姿を語っているところにも、ルカがペトロを自分たち信仰者の代表として見つめていることが現れているのだと思います。

#### ○鶏が鳴く前に

この話において、マタイ、マルコ福音書とルカ福音書が最も大きく違っている点は、次の61節です。「主は振り向いてペトロを見つめられた」。ペトロが三度イエス様を知らないと言ったとたんに鶏が鳴いた。その声を聞いたイエス様は、振り向いてペトロを見つめられたのです。イエス様はペトロがこの中庭に来ていることをご存じであり、鶏が鳴き、あの予告が実現したことを知ると共に、ペトロを見つめられたのです。そのイエス様のまなざしを受けて、ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」という主のお言葉を思い出し、外に出て、激しく泣いたのです。

これは大変心打たれる場面なのですが、しかし疑問に思うこともあります。ペトロは、振り向いて自分を見つめられた、そのイエス様のまなざしに触れた時に、わたしを三度知らないと言うだろうというイエス様の言葉を思い出したというわけですが、それは思い出すのが遅いのではないかと、という気がします。イエス様の予告の言葉は、つい数時間前に、最後の晩餐の席上で語られたばかりです。それを忘れてしまっていたというのもおかしなことですが、それは記憶から失われていたということではなくて、そんなことが自分に起るとはとうてい考えていなかった、イエス様を否定するような言葉を自分が口にすると、思ってもみなかった、という状況だったのです。

つまり、ペトロはこの時冷静ではありませんでした。恐ろしさに震えながら焚き火に当たっていた、その時に、女中に「この人もあのイエスと一緒にいた」と言われて思わず「わたしはその人を知らない」と言ってしまったのです。そのままその場から逃げ出したいという思いと、少しでも主イエスの近くに留まって、成り行きを見届けなければ、という思いとのせめぎ合いの中で動くことができずにいるうちに、二度、三度と否定の言葉を繰り返してしまい、結

局イエス様の予告の通りになってしまった、ということでしょう。私たちが試練の中で信仰の挫折に陥る時にも、それと同じことが起るのです。いつも冷静に客観的に状況を判断して行動できるわけではないのが人間の弱さであり、私たちはそういう弱い人間なのです。

そのように私たちは、ペトロのここでの心の動きについていろいろと自問自答するわけですが、しかしそういう自問自答よりも、聖書が、このルカによる福音書がここで何を語ろうとしているかに私たちは注目したいと思います。聖書を読んでいろいろとものを考えることは大事ですが、聖書の言葉にしっかり聞くことの中でそれはなされなければなりません。この箇所においては、イエス様が振り向いてペトロを見つめられた、するとペトロは主の言葉を思い出した、ということが大事です。ペトロがイエス様の予告の言葉を思い出したのは、鶏の鳴く声を聞いて「そういえばイエス様は、あのようになっておられた」と思い出したのではありません。「主は振り向いてペトロを見つめられた」、それによって彼はイエス様の言葉を思い出したのです。この時、この大祭司の家の中庭で、イエス様とペトロの目が合ったのです。周りの人々は誰も気付いていない中で、二人だけの時が流れたのです。そのことが、ペトロに大きな衝撃をもたらしたのです。それこそが、ルカがここで語ろうとしている最も大事なことだと思うのです。

#### ○イエス様のまなざし

振り向いてペトロを見つめたイエス様のまなざしはどのようなものだったのでしょうか。それは何を語っていたのでしょうか。イエス様とペトロの間に、ここでどのような無言の会話がなされたのでしょうか。「それ見たことか、お前は『主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております』などと威勢のよいことを言っていたが、結局私が言った通り、三度も私を知らないと言って、私との関係を否定してしまったではないか」。イエス様のまなざしはどのようにペトロを責めていたのでしょうか。ペトロはイエス様のその叱責のまなざしに触れて、自分の信仰の挫折を予告しておられた主のみ言葉がその通りになったことに思い至り、どこまでもイエス様に従って信仰を貫くことができると自分の力、自分の信仰に信頼し自信を持っていたことがいかに愚かな思い上がりだったのかを思い知らされ、その悲しみの中で外に出て激しく泣いたのでしょうか。そうではないと思います。

ペトロを見つめたイエス様のまなざしは、彼を叱責していたのではなくて、むしろ、22章31、32節のみ言葉をもう一度彼に語りかけていたのです。それは「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」というみ言葉です。シモン・ペトロは今、まさにサタンのふるいにかけられ、その試練の中で信仰の挫折に陥り、イエス様との関係を否定し、弟子として従っていくことができなくなってしまったのです。そういうことが起ることを、すでにイエス様はご存知でした。ペトロは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言いましたけれども、そのペトロの覚悟など、サタンによる試練の中ではひとたまりもないことをイエス様は知っておられたのです。そういう弱さを抱えているペトロを、イ

イエスは責めたり、断罪して見放そうとしておられるのではなく、むしろ彼のために、彼の信仰が無くならないように、祈って下さっているのです。

振り向いてペトロを見つめたイエスのまなざしは、ペトロのためのこの祈りをこそたっていたのではないのでしょうか。ペトロは、イエスのまなざしに、三度「知らない」と言ってしまった自分のためになお祈って下さるイエスの慈しみをこそ見たのではないのでしょうか。「信仰が無くならないように」というのは、彼と神様との、そしてイエス様との、関係が失われてしまわないように、つながりが断ち切られてしまわないように、ということです。ペトロは、イエスのことを「知らない」と言ってしまい、イエス様との関係を、つながりを、自分で断ち切ってしまったのです。しかしイエスは、その関係を、つながりをどこまでも保ち続けようとしておられます。そのために祈って下さっています。その祈りの一つの具体的な現れが、42節の、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」という祈りです。試練の苦しみの中で信仰を失い、神様との関係を断ち切ってしまう人間の罪を、神様の独り子である自分が背負って十字架にかかって死ぬことによって、彼らの罪が赦され、神様との関係が保たれる、それが父なる神様のみ心であるなら、そのみ心に従って十字架への道を歩み通そう、そういう祈りの戦いをイエスは戦って下さったのです。

これこそが、私たちの信仰が無くならないようにとのイエスの祈りです。ペトロはイエスが自分のためにこのように祈り、その祈りの通りに生きて下さっていることを、あのまなざしの中に見たのです。その時、彼は初めて、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とおっしゃった主のお言葉の本当の意味を悟ったのです。それは、「お前は強がっていても結局は私を裏切る情けない人間なのだ」というダメ出しでもなければ、「このままだとこんな情けないことになるぞ。だからもっとしっかりして、私にこんなことを言われぬような人間になれ」という叱咤激励でもなくて、サタンのふるいの中でひとたまりもなく信仰を失い、イエス様との関係を断ち切ってしまう弱く罪深い自分を、イエス様は見捨てることなくどこまでも愛し、その自分のために祈り、つながりを持ち続けて下さるという、イエスの強い意志を示すお言葉だったのです。イエス様ご自身のこの強い意志によって、ペトロとイエス様との関係、つながりは、たとえペトロがそれを否定し、拒み、もう自分とは関係ないと宣言してしまったとしても、なおつながり続けるのです。

## ○ペトロの涙

イエスのまなざしによってこのみ言葉の本当の意味に触れたペトロは、外に出て激しく泣きました。彼がそこで流した涙はどのような涙だったのでしょうか。勘違いしてはいけないのは、彼はイエスのまなざしに自分のために祈って下さっているイエス様のお姿を見、そこに罪の赦しの恵みを見出して、その恵みに感極まって泣き、その涙と共に慰めを得て、新たに歩み出すことができた、ということではない、ということです。このように激しく泣いたことによってペトロが信仰の挫折から立ち直った、などと聖書は語っていません。自分のために、信仰が無くならないようにと祈って下さっているイエスの慈しみをそのまなざしに

見出した彼は、それゆえに、ますます深く、自分がしでかしてしまったことの罪深さに気付いたのです。このように自分のために祈っていて下さり、自分とのつながりをどこまでも保ち続けようとして下さっているイエス様を、自分は、三度も、知らないと言ってしまった、イエス様との関係を否定してしまった、裏切ってしまった、そういう取り返しのつかないことを自分はしてしまったのだ、ということに彼は愕然としたのです。

それは、私は、私だけでなく人間は、弱いもので、試練の中で信仰の挫折に陥ることがある、み心に従うことができなくなってしまうことがある、失敗してしまうことがある…、そんなふうに説明し、言い訳することのできない、もっと自分の存在の根底を揺さぶられ、その土台がガラガラと崩れ落ちていくような体験です。ペトロはそういう、とりかえしのつかない罪の悲しみの中で激しく泣いたのです。それは、しばらく激しく泣けばそれですっきりして、慰めを得て立ち上がることができるというような涙ではありません。ペトロはこの時本当に絶望したのです。望みを失ってしまったのです。自分の中にある、自分の力でどうにかすることのできる望みの根拠はもう何もなくなったのです。しかしそのように全ての望みを失った彼を、イエス様のあの祈りがなお支えているのです。

ペトロがその祈りによって立ち直ることができたのは、この時ではありません。そのためにはイエス様が先ず、十字架にかかって死ななければならなかったのです。そして復活しなければならなかったのです。次にペトロが登場するのは、イエス様の復活が告げられたその場面です。彼のために十字架にかかって死に、そして復活して下さったイエス様がもう一度彼と出会い、招いて下さることによってこそ、彼はこの涙から、絶望から立ち直り、イエス様を信じ、従っていく者として新たに立つことができたのです。

#### ○イエス様のまなざしを受けて歩む

私たちは先月、すでに、イエス様の十字架と復活を覚えて、イースターの時を過ぎました。復活されて今も生きておられるイエス様の、そのまなざしは、今という困難な時代を生きる私達にも、降り注がれています。私たちの地上の生涯における信仰の旅路は、私たちの為に、救い主としてこの世に生まれて下さった神のひとり子であるイエス様が、私たちをどのようなまなざしで、今見つめておられるのかを知り、そのまなざしを受けて私たちもイエス様を見つめていくことです。

ペトロがそうだったように、試練の苦しみの中で私たちはみな、弱い者であり、自分の決意や覚悟などすぐにどこかへ吹き飛んでしまう者です。とりかえしのつかない罪の中で激しく泣いてしまう者です。しかしその私たちの信仰が無くなってしまわないために、イエス様が祈っていて下さり、私たちとのつながりを保ち続けて下さるのです。そのことを語っているイエス様のまなざしの中で生きることが、私たちの信仰であり、そこにこそ、私たちの絶望を乗り越える救いがあるのです。